
蛹

青池 間広

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛹

【Nコード】

N7220N

【作者名】

青池 間広

【あらすじ】

ある日、平凡だったはずの少年の日常は崩壊した。異常者に監禁された揚句、手足と、触覚を除くすべてを失ったのだ。かろうじて救出された彼は、たった一人の家族である母親と共に、平和な生活を取り戻そうとする。しかし、他人の心ない“言葉”によって、否応なく傷つけられていく。やがて少年はすべてから逃れるように“蛹”に閉じこもるようになる。

（前書き）

本作には、本来ならば医学的な知識が特に必要とされる場面があります。作者が不勉強のため、それらの箇所には誤りが多々あるかもしれませんが、どうかご容赦ください。

尚、作中に登場する特定の福祉器具は実在しません。

金原京次。それがぼくの名前。今年になって、やっと小学三年になったばかりだ。近くに川が流れているマンションの屋上に近い部屋で、ママと二人で暮らしている。

パパは、ぼくが生まれる前にママと喧嘩をして家を出て行ったらしい。だから、パパの顔はもちろん知らない。

ある日、ぼくは変質者のおじさんに誘拐された。

下校中では変質者に気をつけて出来るだけ一人で帰らないように心がけて下さい。学校が終わる前、決まってホームルームの時間に、先生はいつもそう言っているのは聞いていた。だけど、他の皆と同じように自分に限っては平気だ、とそう言い聞かせてきた。

そして、ぼくは捕まった。何の変哲もない普通で学校では取り立てて何も起きなかった日の下校途中、その変質者のおじさんに何の前触れもなく連れ去られた。そして、手と足を切り落とされてしまった。その次に耳と鼻と舌、最後には目も盗まれた。

今のぼくには何もない。何も見えないし、何も臭いはないし、何を食べたり飲んだりしても、味は全くしない。それに物を持ったり、外を歩いたりする事も出来なくなった。

全部を失った時、自分は蛹になった、と気づいた。周りを覆っている世界に散らばる、すべてのものを消し去ってしまったのだ。そして、そこから抜け出す事も出来ない。

もう二度と、きつと永遠に、そうだろう。

もうどれくらい前になるかな。あの日がどんな出来事があったんだっけ。日にちと曜日は覚えてるけど、全部は思い出せない。ただ、

いつものように退屈な授業が終わって、家に帰ろうといつもの道を歩いていた場面からはつきりと憶えている。ぼくの頭の中に、あの日の情報が入った棚があるとしたら、それ以前の時間の棚はすっぽりと抜け落ちていたろう。

たぶん雨が降る直前、空は薄く汚れたカーテンが上からバツサリと掛ったようにジメジメと薄暗い。

遠くの方角で雲の中から何か光るのが見えた。それが雷で、少しの時間を置いて鳴り響くのを知っていたぼくは、慌てて耳を塞いだ。しばらくしても何も聞こえないので、手を退けた瞬間、ものすごい爆音がそこら中で鳴り響いた。遅いけどもう一度耳を塞ぎ、目を瞑る。ついでに口も堅く閉じた。

そうでないと、あのすごい雷鳴がぼくの頭の中まで引つ掻き回して滅茶苦茶にしてしまうような気がしたからだ。

ホントは他の友達と一緒に帰りたかったけど、その帰り道の近くに住んでいるのは、なぜかぼくだけだった。それを以前、ママに聞いたら、「それはおウチがお金持ちだから。ママがいつもキョウちゃんのために頑張ってるからなの」と得意げに言って、だからキョウちゃんも大人になったら負けないように頑張ってる。いつもそんな風に話をして締めくくる。

ちなみにママは、家から少し離れたどこかパソコンの大きな会社で部長でもある。キャリアウーマンって言うのかな。でもママは、なぜかその言葉はあまり好きじゃないみたい。

とにかく今日は、好きなアニメがあるから早く帰らないと。今日は確か……そう思い速く歩いていたら、僕の後ろに誰かが立っているのに気づいた。ぼくの行く手に薄暗く大きな影が覆っていた。

しかし振り向いた僕の顔に、いきなり何かが被さる。学校の先生がいつも言っていた変質者という言葉が脳裏によぎった。僕はジタバタと暴れて逃げようとしたが、大人であるそいつの方が力は強く、全然身動きがとれない。口を押さえられているのがハンカチみたいな布は湿っていて、なんだか酸っぱい匂いがする。

意識は遠くの方へ消えてしまいそうな感じに襲われる。頭が重くなつて、そして目の前の瞼が閉じようとする。

ぼくは、アクセサリーと一緒にランドセルの真横に付いている防犯ブザーを鳴らそうと必死に手を伸ばした。

でも、その手に力が入らない。だらりと下がる手を見つめながら、ぼくの意識も消え入りそうだった。その強烈な睡魔は、授業中になるものとは比べ物にならないほどで、それは視界の端から大きな団幕が下がって来るような感じに似ていた。

ぼくの意識は、深い暗闇の底に落ちていった。

2

眼が覚めると、そこには知らないおじさんの顔が一杯に映っていた。その人がぼくの顔をじつと覗き込んでいる。ぼくは仰向けに眠らされている。目に映るのはおじさんの顔と、その後ろから照らされた、とつても眩しい光。目を瞑りたかったけど、目の前のおじさんがこちらを見つめているのが怖くて、何も言えなかった。

これが怖い夢であってほしい。目が覚めると、いつものように僕は自分の部屋のベッドで寝ていて、ママが台所ですでに朝食を作っていて、それで。

「おはよう、金原京次くん」最初におじさんはそう言った。

「驚かして悪かったね。でもね、京次くんをここに連れて来るにはこうするしかなかったんだよ」

「ごめんよ、と言われても、こんな人は知らない。でも、その人はっきりとした言葉を聞いていると、ここは夢の世界ではないという事は分かった。」

「どうしてぼくの名前を知ってるの？」

それでも未だに夢の中の出来事だと信じていた。ぼくは口をゆっくりと開いた。喉がカラカラに乾いて少し痛い。

おじさんは驚いた様子で頭を掻いた。髪の毛から白い粒粒がいく

つも落ちてくる。少し不潔そうだな。その人相は学校に貼っているポスターに描かれた変質者の似顔絵そのものだ。

「おじさんは誘拐犯ですか？」

「君のお家は金持ちかい？」逆に聞いて来る大人の人も珍しいな。

「お母さんと一人です」

「母子家庭で金持ちなら、君は運がいいね。でも私は、別にお金は欲しくないんだよ。君の体が欲しい」

それを聞いてぼくは全身を強張らせた。やっぱりこの人はぼくに何か変な事をするつもりなんだな。

「正しくはその一部が欲しいんだ」

「体の一部？」

言っている意味が分からずに聞き返してしまい、思わず唇をキュッと締めた。なぜか聞き返してはいけない気がしたからだ。

「ああ、手と足を貸してほしい」

一体何を言っているのだろう。このおじさんはもしかしたら、ホントに頭がおかしいのかもしれない。

「私にはね、息子は一人いたんだよ。その子の顔は、愛想を尽かして家を出ていった妻に似ていた。けど、とても優しい子だった」

おじさんは天井を見上げながら、僕が寝かされている寝台をグルグルと回りながら言う。

「丁度、君と同じ年の子だ。学校も同じだった」

目線の端からおじさんの姿が出てきたり消えたりする。

「でもね、ある日、馬鹿な奴が、息子をトラックで轢き殺したんだ。そいつはお酒をたくさん飲んでいた」

おじさんは眼鏡を取って、写真立てを見つめる。その頭は怒っているように小刻みに揺れる。そしてそれをぼくの顔の前にも向けて見せた。どこかの遊園地で、おじさんが子供と一緒に映っていた。こちらに向かつて、ニツコリと笑いかける。

「かわいそうな子だ。首から下はペチャンコになっていた。顔もグチャグチャになってしまった。息子を殺した奴は、今も警察に捕ま

っていない」

おじさんは写真立てをどこかに置くと、その肩を大きくすくめて、ため息を漏らした。そして、僕の方に振り返る。

その顔はさつきとは打って変わって、明るい笑顔だった。

「でも、心配しなくてもいいからね。君にも後で、新しい体を縫い付けてあげるから。もうしばらくの辛抱だよ。そう言いながら、手に持った注射器を僕の腕に刺した。チクツと痛みを感じて少ししてから、ぼくはまた眠たくなった。

寝るな。寝るな。寝るな。そうではなかった。ぼくは麻酔をかけられると眠くなると、テレビで見た事があつたのでずっとそうだと思っていたけど、眠くはならず体だけが重く感じられた。口もチヤククで閉じられたみたい動かない。目も開けているのに目の前を見つめることしかできない。

元に戻った時、ぼくの足はなくなっていた。

足があつた箇所は包帯でグルグル巻きにされて、薄い赤色が滲んでいる。そこを触ると飛び上がるほど痛い。でも、怖いのか悲しいのか分からなかった。

たくさん泣いているぼくの元に、おじさんが手を後ろに組みながら近づいてきた。殴られてしまうのかと身構えていたら、その手は優しく頭を撫でて、そして包帯が巻かれた付け根をさする。

ビクツと震えながら、今いる場所を忘れ、小さく後ろに下がろうとして壁に頭を打った。ぼくが入られた部屋は狭い押入れだった。「この部屋の壁は防音加工されているから、どんなに大きな声を出しても外には全然漏れない」

だから今はしっかりと泣きなさい。まだ次の手術も控えているからね。目を光らしたおじさんの顔は、とても青白かった。

足がなくなつて、眼の高さがいきなり低くなった。今まで見ていた世界が少し下にずれたのだ。そして、もう自分で立って歩けないし走れない。最初に足を切ったのは、ぼくが逃げないようにするた

めだったのかもしれない。でも、元に戻せると、おじさんは言っているのにどうしてそうする必要があるのだろうか。

しっかりと包帯が巻かれている下半身は、傷口を床につけるとやっぱり痛かった。だからぼくは押入れの中ではずつと横になるはめになった。体勢を直すのに体を起こすのが一番大変だった。

足を失ったその日から、ぼくはどうしようもなく絵をたくさん描きたいと思うようになった。ランドセルから自由ノートを取り出し、筆箱は見つからなかったので、ランドセルの底に転がっている用済みの短い鉛筆を偶々見つけたので、それを使った。

もうすぐ、この手も盗られてしまう。ぼくはゲーム、アニメや漫画のキャラクターを一心不乱に描いた。クラスの中にはもつとまじい奴もいるけど、そんな事はここでは関係ない。どうせ、もうすぐこの手はぼくの体から離れていくのだから。まだ大人よりも小さく細い両手は、暗い押し入れの中で白く光っているように見えた。まるで何かを訴えかけているみたい。

数日経ったある日、押し入れの鍵が開く音でぼくは体を強張った。襖が開いた時、部屋の明かりで目を咄嗟に瞬かせた。窓は曇りガラスなのに、天井の照明は太陽のように眩しかったのだ。顔を出したおじさんはぼくの方に屈んで、ニツコリと笑いながらおはようと云って白い歯並びを見せる。

「さあ、手術の時間だ。すぐに終わるから大丈夫だよ」
その後、ぼくは両腕も失くした。

おぼろげな意識の中、足の時と同じく、自分の両手、正しく言えば両腕が切り取られる場面を見た。白い服を着たマスクをしたおじさんが寝台の上にいるぼくの真横を行き来し、その間、大きなナイフとのこぎりを交互に持ち替えてながら、机に戻すという作業を何度も繰り返し返している。

肉が切れる音、骨が掠れる音が耳元に届くたびに、音量が増幅して頭の中を掻き鳴らす。

移動する回数が増える度に、少しずつぼくの腕の感覚がなくなっていく。体につながっていたものが少しずつそこから抜け落ちていくようだった。その間、ぼくは何もできない。早く逃げないといけない。そんな感覚は足が消えた時から、ぼくはそれを強く思う力は出来なくなっていた。這って逃げるなんて、できやしない。

最初は右手。幼稚園の時に木登りをした時に落ちてできた縦の傷跡が肘に走っている。怖いから指先に力を入れると、最初は数本の指が微かに動いた。けれど、徐々にピクンピクンと反応する間隔が遅れるようになって、その動きも徐々に弱くなる。

何の前触れもなく、首から下の右辺りからゴトンツと音が聞こえ、それ以降、右肩に右腕がある感覚は消えた。

おじさんがぼくの左側に回り込んで、次の切断に取り掛かる。

一年生の時のハンコ注射の痕が残る腕。おじさんは右腕の時と同じ作業を淡々と繰り返す。ぼくも、さきほどと同じように名残惜しく指を小刻みに動かした。その反応も少しずつ遅くなる。

ゴトン。重い音と共に最後の腕が体から離れる。両端にかかった重さが一気に無くなり、両足もなくなった。ぼくの体は一気に軽くなった。その代わり、体の重心がぐらぐら揺れるようになった。全身を支える背骨が痛む。僕はダルマになってしまったのだ。

手術が終えて、臍から抜け出したぼくはやっぱり同じように泣いた。すると、前回と同じくおじさんが、全部の手術が終われば必ず元に戻してあげるから、今は我慢してほしいと言いさらに、君のおかげで息子の手術も順調だと、嬉しそうにお礼として頭を撫でた。

吐き気が込み上げたぼくは、その場で吐いた。涙が塗れたぼくを見上げ、おじさんは言った。その顔は、口は笑ってはいたけど、目がそうではなかった。とても、そうは見えなかった。

「かわいそうに。もうすぐ苦難は終わる。少しの辛抱だよ」

ぼくはおじさんが子供の手術をしている事がどうしても信じられなかった。理由があるわけでもないけど、それはおじさんの目を見

ると、それが嘘なのではと思ってしまっ

足と腕がなくなって数日間、体中が痛みだした。足があつた場所、ないはずの指先が、とても痛くて泣きたくなるほどだった。

「それはね、幻肢痛と言つてね、キョウジ君の頭がまだ手足があると勘違いして、“痛い”という間違つた信号を体に送っているんだ。大丈夫だよ、こう少ししたら治るから」

この人はここで何度もぼくに“大丈夫”だと言つた。でもぼくにはその声を聞くと、やっぱり同じ疑問が浮かぶ。

本当におじさんの子供の手術はうまく言っているの？それを聞かないうちにおじさんは言つた。

「さあ、次は顔の手術に取り掛からないとな」

もしかしたら、とは思つていた。手足だけでは済まない。ぼくはママがいつか言つていた事を思い出した。

嫌な予感という言葉はあるけど、良い予感はないでしょ。誰でも、悪い予感の方がよく当たるものなの。

ダルマになつたぼくの体を軽々と持ち上げ、手術台に連れて行くおじさんは、そわそわしているようだった。以前と比べると髪もだらしく乱れて、頬もナイフで削つたように細くなっている気がする。それに着ているワイシャツも皺だらけだ。

「今日は、今までより少し強い麻酔をかけるよ。手術中、キョウジ君は眠つたままになる。大丈夫、難しい手術じゃないからね」

もう何回目だか分らない“大丈夫”を聞く。でも、不安で仕方がないぼくは、それでも黙つているしかなかった。

今さら言つても仕方がないけど、手足のないぼくはどうやってここから逃げられるだろうか。思えば、最初にここに連れてこられた時からぼくに逃げるチャンスなんてなかった。道端でおじさんに捕まつた時もそうだ。最初からぼくの運命は決まっていたのかもしれない。いくら泣いても、おじさんはもう、ぼくの手術を止めたりはしないだろう。ぼくをバラバラにするまで、これは終わらない。

おじさんが大きなガラスのマスクで口を押さえられて、甘い匂いがしたかと思うと、少ししてからものすごく眠たくなってきた。ちよっと待ってと叫びたかった。最後に外の空気を吸いたかった。

ぼくの住む町は工場も多い。空気が汚れているような感じだけど、山や海に行けば、きっと。目の前に広がる海を見て、ぼくは息を一杯に吸い込んだ。それが眠くなるガスと分かっていても、塩辛い海水の風と思いながら息を吐こうとする。それが麻酔のガスではないと自分に言い聞かせた。

そうしているうちに、目の前が暗転した。

目が覚めた時、顔の中央に違和感があった。顔の真ん中が冷たい。鼻で呼吸をすると、空気が入っては抜けていくだけだった。

おじさんが小さな瓶をぼくの方に差し向ける。『アンモニア』と書かれたそれを、鼻があつた個所に近づけられても何も感じなかった。代わりに、少し頭が痛くなって吐き気が込み上げてくる。

ぼくの鼻はなくなった。まるで宇宙人みたいな顔になっているのだろうか。おじさんに鏡を貸してと頼んだけど、断られた。見ない方がいい。刺激が強すぎる、と。

その時のおじさんは、顔に薄く笑みが浮かべていた。わざとらしくてぎこちない、それはまるで壊れた人形のように。

鼻の手術からまた数日後、口も失った。もつと正しく言うなら口を完全にふさがれてしまった。何かをしゃべろうとしても、唇が動かない。口に金属のマスクをつけられた。それに、舌もなくなってしまった。当然、開かなくなった口の中はカラカラに乾く。これからどうやって、食べ物食べていけばいいのだろう。

ぼくの心を読み取ったように、おじさんは「心配はいらないよ。

口の手術の時に、首に小さな穴をあけてチューブを通したんだ」

とても小さくて細長いチューブで、首筋に僅かに開けた穴を通して、流動食や飲み物を食道から胃へと流していく。流動食とはスー

ブなどの事らしい。ぼくは、もうそれしか食べられなくなった。正確には飲むしかできなくなったのだ。

でも、それよりも辛いのが喋られなくなった事だ。もうママに会えたとしても、話もできないなんて。何を言われても、ぼくは返事もできない。挨拶も出来ない。それに、言いたい事も。

「だから、心配ないと何回も言っているだろう。すべてが終わったら、全部元の体に戻してやるから」

ぼくの顔を見ると決まって、おじさんはそう言うけど、その顔は肉をそぎ落としたように、もうほとんど骸骨みたいにやせ細って、目も飛び出しているみたいに大きく見えるし、髭も熊みたいに伸びている。初めて会った時とは、まるで別人みたい。

それより気になったのが、なんだが話し方が乱暴な感じになっている事だった。話の途中でぼくが嫌な顔になると、時々拳を振り上げてジェスチャーをしたり、舌打ちをしたりする。前は少しおかしな感じはしていたけれど、こんなに怖い様子ではなかった。

「それにねえ」

ボサボサに伸びた髪を掻きながら、おじさんは言った。

「どうせ耳を取っちゃったら、何もしゃべられなくなるんだ。結局は同じだよ。君は聾啞になるんだ。分かるか？声や音も聞こえなし、話す口もない。結局同じなんだよ。理解できたかい？」

おじさんの口癖は、最近では“大丈夫”や“心配ない”から、“分かるかい？”に変わりつつある。

そして最後には、こう締めくくる。でも、これはみんな、私の息子や分けても君の為なんだ。“分かるかい？”

だけどおかしいじゃないか。どうしてぼくのためになるんだ。こんな姿になってまで、どんないい事があるのだろうか。ぼくにはさっぱり分からない。分かるわけがないよ。

それに怖い。ここに来た時よりもずっと怖い。もう二度と戻れないのかもしれないから。

それから一週間ぐらいかな。日にちはもう分からなくなってしまう。ずっと暗い所にいるせいで朝昼の感覚がわからない。

そろそろ頃合いだなと言いながら、白衣姿のおじさんは押入れを開けた。それから怯えるほどの目の前に手鏡をかざす。それを見て、ぼくは悲鳴を出しそうになった。鼻のあった場所は、すっかり削られてポツカリと平らになっている。口があつた所に唇の小さな膨らみは消えて、赤い線が薄っすら浮かぶだけだった。ノツペラボウミたいに繋がった皮膚。そこにはもう、両目と眉毛しか残っていない。「今日からしばらくは、音や声が聞こえなくなるから、私との会話はすべて筆談になる。これからは私が紙に字を書いて見せた問いに、君は首を縦に振るか、横に振るかで応答するんだ。いいね」

はい。そう言ったつもりでぼくは、縦に首を振った。僕の方からは話せないんですね。口があればそう言つてやりたいけど、口があれば端からそんな事を言う必要はない。

一体何は間違っているのか、ぼくにはもう皆目見当もつかない。でも、分かった所で、どうしようもない。

麻酔から覚めた時、何も聞こえなかった。

手術前には聞こえていた、壁時計の針が動く音、窓の方から時折微かに聞こえてくる踏切の音、そしてテレビの音や声。体の中の喉を鳴らす音。すべてが消えていた。

この世界から音が消えたら、おそらくこうなっていたらろう、と思つていた事が現実と同じだった。ただ一つだけ、耳を塞いだ時に聞こえる静かな重低音も聞こえてこなかった。

全部の音が消された。一切が沈黙で包まれた部屋。笑みを浮かべながら、おじさんの顔には影が差している。そして何かを書いてある大きな画用紙をぼくに見せる。

「次で最後だ！これを終われば、君を元に戻してあげる！」

おじさんの口が大きく広がる。黄ばんだ歯がなんだか汚らしい。

次は、目。それがなくなったら、もう僕は。

数日後、ぼくから見える世界から、すべての色が消えた。

押入れの中は、薄らとした闇で満ちている。

ここに閉じ込められて以来、周囲に目が慣れ始めた頃から、ぼくは黒色にもたくさん種類があるのを生まれて知った。今まで気づかなかつたどころか、考えた事もなかつた。濃い黒。薄い黒。明るい黒に、真つ黒。綺麗な黒に、汚そうな黒。他にも、外を出られれば、もっと見つかるかもしれないのに。

目を盗まれたら、どんな黒色の世界が映るのだろうか。

パンツだけの姿のぼくは、外から細く盾に走る光が僅かに漏れるだけの、薄い黒色の闇の中では肌色には見えない。ぼくの体は、白く薄い黒になつて周りに同化する。

学校の図工の時間で絵を描く事は時々あるけど、大抵は校庭や花壇とか、綺麗で光る風景ばかり描かされるおまけに図工の先生は『黒色の絵の具だけは使つてはいけません』と言っているから、緑や赤、青、黄色と、明るくきれいな色ばかりを使うからすぐに無くなつてしまう。でも、黒色だけはずっと残っている。

ぼくの世界に広がる綺麗な色は、根こそぎ消えていった。押し入れの戸をいきなり乱暴に開けたおじさんがぼくを抱えあげ、手術台に落とすように置いてから、激しく抵抗するぼくの首を押さえて、無理やり平らな鼻の穴にガスを送る。

そこから先の記憶は消えたままだ。景色を彩る三原色からなる世界は、眠りから覚めた今、もうどこにもない。

そこに広がるのは、薄い黒でも濃い黒でもない。ただ純粹に何もない闇が包んでいる。そこに何の考えも浮かばなかつた。表現できる言葉が見つからない。そう、それがこの色の意味なんだ。

意味を持たない零の景色。この地球が始まる前の世界。もしくは終わった後の世界。そして音もない常闇が目の前にある。

自分は今、そこにいる。これからも永遠に。ずっとそう。

ぼくはいま、すべてをなくした。もう、なにもできなかつた。

足がないから動く事も出来ない。手もないから、何も触れない。何の匂いも感じないし、言葉も出てこない。心の中でしか発せられない。音もなく、目の前に広がる色も見えない。

だからもう外には出られない。それに元には戻れない。今の、ぼくは蛹なのだ。毛虫のように動く事も出来ず、羽化して成虫になるか、または人間に戻る事なんてこれからもないだろう。

ずっと、蛹になったまま生き続ける。

そして最後には、おじさんに残りの体をバラバラにされて、ぼくは殺されてしまう。

3

胴体を除いて全部を盗まれてから、一体どれぐらい経ったのだろう。ある時、床が激しく揺れたような気がした。あのおじさん一人が歩いただけでこんなに揺れた事なんて一度もない。何が起きているかなんて分らない。

今のぼくは闇の中にいる。それは、押し入れの闇ではなく、もっと深く、深く、深く、そして奥行きも広さも分からないし、どこまでも地平線は見えない。

名前の付けられない黒の世界の片隅に、ぼくはずっといる。

ただ後になって分かったのは、おじさんの部屋に警察がやって来て、おじさんを逮捕したという事だった。押入れの中で、戸に背中を預けていたぼくは、それが突然開いたせいで、背中から床に転がった。今度こそ、おじさんがぼくの首まで取るうとしているのではない、と思い、体中がカチコチに固まった。

しかし、どうもいつもと様子が違う。おじさんは、すぐに僕を持ち上げようとはせずにいるのだ。すると、おじさんではない誰かの指が顔に触れた。髪の毛から目や鼻を通り、口があった所に来て、一度止まる。そして首から体中を優しい感じで触ってくる。

おじさんではない“誰か”と思ったのは、いつものおじさんの透

明の手袋のざらざらした感触とは違い、柔らかい女の人の手と分かったからだ。でもママの手にしては少し小さいので違う人かもしれない。その人はぼくを抱きしめた。裸になっっているぼくはとても恥ずかしかつたけど、その人の手や顔はとても暖かかった。

その人の顔のある位置から、水のようなものが流れていた。それが涙だと分かると、たまらなく嬉しくなっただけで泣きそうになった。目のあつた小さなトンネルの中が涙で染みる。

この時になつて初めて、ぼくは助かったのだと分かった。

その後は色々な事が起きて覚えていない。幾人かにゆつくりと持ち上げられ、どこかに連れて行かれる。小刻みな揺れはしばらく続く。その間、ぼくは床に着く事なく、飛んでいるような気になるとゆつくりと誰かの手が体を横に倒す。柔らかな布の感触が背中に伝わる。あの手術台ではないようだ。どこに連れて行くんだらうかと、恐怖はなかつたけれど、不安で仕方がなかった。

仰向けになつたぼくは、ずっと誰かに運ばれたまま小刻みは止まず、それでも下のベッドごと車の中に入った感触があり、そこが病院に向かっているのだと気づいた。そこで、また体を元通りしてくれる手術をするに違いないと、ぼくは有頂天になった。

また以前のように、遊んだりできる。走ったりできるし、おいしいご飯も食べられる。最初は、元通りになつたら最初に何をしようかずっと考えていた。あまりにも短い夢を見ていた。

けれど、その時間が長く経てば経つほど、こう思うようになってきた。周りの人は何も教えてはくれない。優しく触れてくれるだけだ。それは、ぼくの体がもう元には戻らないからなのではないだろうか、という事だった。

ある時、何の前触れもなく僕を強く抱きしめた人がいた。当然、声や顔は分からない。手や顔の肌触りも他の人に似ている。けれど、その人がママだとなんとなく分かった。膨らんだ胸の近くに小さな

宝石が当たっていたから。ママはいつもそこに小さなダイヤのネックレスをつけていたのを思い出したのだ。

思いつきり叫びたかった。勿論、声は出なかった。頭の奥がぼく
の声を響かせた。ぼくは早く家に帰りたい。

絶叫は全て、脳裏に広がる闇の空へと消えていく。

4

マンションに帰ってしばらくして、ママからプレゼントをもらった。ぼくが自分以外の人と話ができる機械らしい。その名前はとも長くて今も覚えていない。どこかの研究所が開発したという最先端の医療器具だと、後で教えられた。

その現物を見られないぼくは、SF映画に出てくるような大掛かりな機会を創造していたけど、どうやらノートパソコンぐらいの大きさで分かり最初は驚いた。

まず頭にヘッドホンのような帽子を被り、その周りに何か小さなパットみたいなものをこめかみにペタペタ貼られた。なんだかくすぐったい感じはしたけど、我慢していると始めにちよつと頭痛がする。そしてそれを少し我慢していると。

ぼくが愕然とした。真つ暗やみの中で連続して黄色に光るひらがなが立体で浮き出てきたのだ。それは。

『き・よ・う・ち・や・ん』

ぼくを呼んでいるのだ。ママはいつもぼくをそう呼んでいた。少し前はそのあだ名で呼ばれると、甘えているようで恥ずかしかったけど、今はこのままでいいと思った。

でも、この機械はぼくの言葉を出してくれるわけではない。あくまで、ぼくに言葉を伝えるためにものだった。ぼくは、相手の言葉に対して、イエスなら首を縦に振って、イエエなら横に振る。そうするしか意思の疎通ができなかった。

それでも前よりずっといい。ぼく達は、一日もお互いにかけて語

り合った。今までぼくの身に起こった事、親戚や友達がぼくの身を心配してくれた事。次から次へと、洪水のように溢れ出て来る

そしてママは、これからのぼくの事についても話した。しばらく何も文字を浮かべてくれなかった。それがやっと出て来た時には、いくらぼくでも、その予想はついてた。

『が・つ・こ・う・は・お・や・す・み』

キョウちゃんの体力では毎日行くとつらくなる。お医者さんもそう言っているから。ママの文字を読む間、ぼくがこう思った。

ぼくが行くとみんな怖がってしまうからかもしれないのだ。皆の前にいる間、どんなふうに見られて何を言われているのかは、闇とこの蛹の殻に閉じ込められた今のぼくには認識できない。

それでもぼくは怖かった。あの人達が来て以来、その考えは本当かもしれないという思いは強くなった。

5

『あしたは、てれびきよくのひとたちがくるわよ』

機械の言葉に慣れて、一文字ずつ区切りを置かなくても読めるように上達したある日、来週の日曜日にテレビ局の人たちが取材を申し込んできたというのだ。ぼくがよかったら、OKを出すと言っている。ママの前で灰色の返事の意味として、頭を動かさずそのままにした。考える時間が欲しかったのだ。

テレビ局が来るという事は、ぼくの姿は全国に知れ渡ってしまうというのを意味している。でも、ママはその方が色々な人にキョウちゃんの事を知ってもらう機会になると言っている。沢山の人が味方してくれるのだという。はたしてそうだろうか。

いや、ぼくは蛹に入ったままなのだ。それは正しいとは考えてはいない。いつまでも塞ぎこんでいても仕方がないんだ。それにママの言う通り、ぼくを心配してくれる人だっているかもしれない。

その翌日、散々悩んだ結果、ママに向かってぼくは首を縦に振っ

た。取材を申し込んでもいい。肯定のサインだ。

じゃあ、おめかししないかねと、いつものように風呂場に連れて行くと、体が傾かない特別な座椅子に座らせ、ぼくの髪や体をいつもより綺麗に洗ってくれた。

そして特注で頼んだという新しい服を着せてくれた。鼻がないから何も匂いはしないけど、なんだかフカフカして気持ちよかった。

テレビ局の人たちが来た時、床をドカドカと踏む揺れが連続に伝わった。なんとなく、すごく乱暴な感じがする。あのおじさんが集団でやって来るイメージが浮かび、反射的に背中が震えた。

インタビューをするタレントのお兄さんは、紹介の名前が浮かんできても、ピンとこなかった。どうやら、ぼくが誘拐された頃からブレイクし始めた人らしい。

だけど『こんにちはきょうじくん』最初に打ち出された挨拶は至って普通だったので、緊張していたぼくは少し拍子抜けして安心した。それから、当たり障りのない事　おじさんに誘拐されて怖くなかったかとか、今の状態はつらくないかとか　を聞いてきて、僕も正直にありのまま答えていく。

この受け答えをしているだけで、沢山の人にぼくを知る人が増えて、それで何かいい方向に変わるのならそれでもいい。

それにしてもこの人達は どうしてこんなに早口なのだろう。会話を追うのにも一苦労する。全部がひらがなだから余計に大変で、闇の中、小さな単語がマシンガンのように次々と横をかすめてはすぐに消える。何度も聞き返す羽目になった。その繰り返しを追うのは、まるで時計の秒針と長針と似ているかもしれない。キリがないように、なんだか嫌気がさしてくる。

まるで、この人達がぼくを追い越しては、一周遅れで走っているぼくにまた追いついているかのよう。

質問は相変わらず浮かんでは消える。その内容も、段々どうでもいいような内容ばかりに変わっている気がする。好きなアニメは、ゲームは、学校に行っていた頃、好きだった給食は何？

それはホントに重要な質問なの。どれも、誰でも応えられるような事ばかりじゃないか。本題からズレてる気がする

文字の洪水がぼくに向かって来る。それは3D映画のように接近してくるが、顔に激突する寸前で消滅する。

ふと『まるでけむしみいだね』という言葉が出てきた。会話を
する時のぼくは、ゆっくり頭を小刻みしている。

ぼくは、不意にその行為を止めた。

そして、キーボードが置いてあるはずの方向に顔を向けて、石の
ように動かずにいた。

質問の文字がいくら積もっても、何も答えなかった。

『きょうじくん？』

さすがにおかしいと気づいたのか、タレントの人は少し間を置いて、聞き返してくるが、ぼくは無反応のままだった。

ぼくは虫じゃない。ぼくは人間だ。目が残っているなら睨みつけてやりたい。そして口がまだ残っていたならそう言ってみてやりたい。手があればその顔を殴ってやりたいし、足があれば蹴ってやりたい。でもそのいずれも、今のぼくにはない。

ポツカリと空いた眼窩が痛い。そこに流れる涙が全然止まる事もない。だから、ぼくは何時間もじっとしていた。

どれだけ時間が経っただろうか。ママがテレビ局の人は帰っていったと教えてくれた。気分が悪くなったと言っておいたらいい。

『あなたはなにもわるくない』そう文字を送り、ぼくの肩に手を置き、その細い体をそっと抱きしめた。

両腕がまだ残っていたら、ぼくもそうしたのに。

6

『金原君、ダイジョウブだった？』

俊也君も文字が浮かぶ。続いて、交代した梓君の文字が現れる。

『クラスのみんなも心配してるんだ』

ぼくは肯定の他に、嬉しい感情を表現を意味する頷きを繰り返しながら、二人との会話を楽しんでいた。

テレビ局の人が来てから数日後、今度はクラスメートで友達の俊矢君と梓君が会いに来てくれたのだ。

ぼくがいなくなつてから、ずっと宿題やノートを映してくれていたらしい。二人は、今度発売になる新しいゲームの事も話してくれたけれど、ぼくがもうゲームができないのに気づくと、揃って謝ってくれた。でも、そんな事はどうでもよかった。彼らが来てくれたこと自体が、今のぼくには胸が躍るほど嬉しかった。

先生は時々お見舞いに来てくれる。親戚のおばさんやおじいちゃんたちも以前から会いに来てくれた。けれど、クラスメートは誰も来てくれないのですごく心配だった。

だから、彼らが訪ねて来てくれた事でも心が躍り、この間の辛い出来事も忘れるぐらいだった。

最近では、勉強と練習をやったおかげで、カタカナと漢字が一緒でも言葉が普通に読めるまでに上達した。そうなるまで一日中、ママや先生と会話をした日もあったほどだ。

『ジューズとお菓子持ってくるね』

ママが言葉を打って、小さな揺れが響いてから少しして、突然僕の頭にある一言が浮いて出てきた。

『キモ虫』

僕は何も言えなかったし、首を振る事もしなかった。意味が分からなかった。時間が止まり、闇の中で、その言葉が消えるのが遅いような気がした。「え？」としか浮かばない。

当然、それは俊哉君か梓君のどちらかの言葉だけど、二人の言葉でもある。でも考えている言葉は同じだったかもしれない。

二人はママがジューズとお菓子を運んで来た時、用事を思い出したと言つて慌てて帰つたという。

ぼくは、その一件を内緒のままにしている。ママには余計な心配だけはかけさせたくはない。もう充分苦勞させているのだから。だ

けど、それから学校の友達は何も来なかった。
それで結構だった。ぼくも誰とも話したくなかったからだ。

もう誰とも話をしたくなかった。皆はぼくの姿を見て化け物呼ばわりしている。していかなくても心の中でそう思っているんだ。

俊也君と梓君が会いに来て以来、クラスメートの誰も会いに来なくなつた。あの二人は、調べに来たんだ。ぼくはどんな姿になつたのかを。そして皆にそれを報告しているに違いない。

だからみんなは怖くなって来なくなつた。でもあの二人は笑つていたはずじゃないのか。怖いのに、どうして笑つたんだ。

しばらくしてから、ぼくはその答えが分かつた。

あいつらにとつて、僕の虫みたいな姿は異様だけど、笑いを誘つてしまうほど滑稽な姿なんだ。気味は悪いけど、面白い格好をしている。まるで怪獣映画に出てくる怪物みたいだなつて。

テレビや映画でしか見た事のないような奴が目の前に、しかも元は自分の知り合いであっても、それはもう赤の他人と同じだ。あの日、二人が見ていたのは、金原京次という名前のぼくではない。未知の化け物になつたぼくの方だ。

皆にとつて、ぼくはぼくでなくなつたんだ。

7

『キョウちゃん、美歩ちゃんが来たわよ』

ある日曜日にママが教えにきたのは、幼稚園の頃からの幼馴染の美歩ちゃんが見舞いに来たという事だった。こんな姿出会うはずがないだろ。部屋に入れるな、ぼくは答えた。本当にいいの。何度もママが聞いてきたけど、返答を変えるつもりは毛頭なかった。

美歩ちゃんは、ぼくのいるマンションから少し歩いた先の住宅街の家で暮らしている。小学二年になつた時、恥ずかしくなつたぼくが断るまで一緒に通学していた。

あいつも、今のぼくの姿を見れば、二人のようにどこかに消えてしまう。もう二度と会いに来る事もなくなるに決まっている。

もう、あんな思いをしたくはない。ぼくは、美歩ちゃんとの思い出を忘れようとした。幼稚園の時から、弱虫なくせにどこが気の強い性格だった。ぼくらはその点では少し似ていたかもしれない。

何時間か経った頃だろうか。ぼくのいる部屋に何かがいるような心配がした。それは目で見えるわけでも耳で聞こえるわけでもないけど、長くこんな状態で同じ部屋にいれば、さすがに誰かが入って来ると何かが変わったような気がする。これはもしかすと、ぼくの肌を感じ取っているのかもしれない。

例えば、この部屋に誰かがこっそりはいって来る事で、この部屋の空気の流れと言うのかな、風の向きが少し変わるみたいな。結構前に観たアニメにもそんなものがあつたように覚えているけど、実際そうなってみると、笑ってしまうけど満更でもない。

じゃあ、人ががいるとすればそれは一体誰だろうか。ママはそんな事はしない。おそらく。ここに入ってくれば、開口一番に機械を使つて何かを話すからだ。

ぼくは体に少し力を入れて、平たい椅子から傾いた。試してみたのだ。うつ伏せで床に転んだ後、その誰かが大人ではない小さな手で体に触れて、前に倒れていたぼくを起き上がらせた。

ぼくはそいつの顔がある位置辺りに向けて、自分の怪物の顔を見せてやった。相手の動きが止まり、少しして小さく震える手がこちらに伝わってくる。とても微かなそれは、今のぼくにはゆすぶられているぐらいはつきりと分かった。こいつは怖がっている。

怖いなら、気味悪がっているなら、どうして会いに来たんだよ。

首を思いつきり何度もがむしやりに横に振り、否定の合図を意味もなく送り続ける事で、厚かましい来訪者を全力で否定する。

来るな、帰れ。来るな、帰れ。闇の中で、ぼくは叫ぶ。

帰れ。ぼくは、今はもうない目と鼻の先にいるそいつに向かつて、声のない怒りをぶつけ続ける。来るなと言ったのに。入るなと言っ

たのに。触ってほしくなかったのに。

すると、顔を小さな手がゆっくりと確かめるように流れた。さらさらした感触だった。あいつがぼくの顔を触っている。その際の電流が流れた感じは、恥ずかしさと嫌悪感だろうか。それとも。

闇の先から、たどたどしく文字が浮かんだ。

『ごめんね』

それは徐々におぼろげに薄れて、そして消えた。さっきまで感じていた気配も同じようにいなくなった、ような気がした。

しばらくしてからママの言葉が浮かんできた。いつからそこにいたのだろう。まさか、あいつがずっとここにいるのを知っていたのか。ぼくの心の底で、冷たい火がくすぶり始める。

『美歩ちゃん、泣いてたよ』

それは、ぼくの顔が怖かったからだ。これでもう二度と、勝手に部屋に入って、ぼくの顔に気安く触ったりなんかしないでだろう。

『あの子ね、私が買い物から帰ってくるまで、ずっとドアの横で待っていたのよ。キョウちゃんに会わせて下さいって、何度も頼んできたわ。それで』

それで可哀そうだから。だから、ぼくに内緒で部屋に入れたの。少しの間が空いた。怒りで小さく震える肩に手を置き、ママはぼくの頬と、それから少し伸びた髪を撫でる。そして緩やかな小川を流れるようにして、言葉の連なりが暗闇を照らす。

『あの子は怖くて泣いていたんじゃないと思う』

どうして、そうだと分かるのさ？人の心が読めるわけでもないのに。肝心の、ぼくの心は読めないくせに。

『美歩ちゃんは、本気であなたの事を心配してくれているの。そばで見えていたから、それが嫌というほど分かったわ。さっき泣いていたのもそう』

ママの言葉の放流が、闇の中に溜まり続ける。それはまるで、ぼくという透明の体が雪で埋もれていくよう。

『今のキョウちゃんが可哀そうだと思ったから』 最後まで言わ

せずに、わざと自分で椅子から転んだ。

ママが体勢を直しても、何度も椅子から転んでやった。

どいつもこいつも大嘘つきだ。ぼくが嫌いなら、もう近づくな。

あの一件以来、ぼくはずっと、ママに対して反抗的な態度ばかりを取るようになった。わざとイスから転んだり、首にチューブを付ける時に首を振ってみたりした。最初は、ママも冗談だと思ったらしく、一緒にふざけていたが、僕は本気だと分かって来ると少し言葉尻を尖らすようになった。

『止めなさい、キョウちゃん。何、拗ねていの。まるで小さな子供みたい』

そうさ、ぼくはまだ子供だよ。まだ10歳にもなっていないお子様が駄々をこねているんだ。そのどこが間違っているの。こんな子供が芋虫みたいになる方がずっとおかしい。同じ子供が何千人もいる中で、よりによってぼくだけが選ばれないといけないんだよ。

ぼくがそうする度に、ママの注意も少なくなり、無視するようになったけれど、ぼくの嫌がらせは続いた。

しまいに長い時間、横転したままでいたせいで、体の節々が痛んだ。結局、ぼくは誰にも伝える事なんてできない。

死ぬまで、物言わぬ蛹のままなんだ。

7

『キョウちゃん。話があるの』

ある日、お風呂を終えて、ぼくに服を着せたママが言ってきた言葉は思いもよらない事だった。

『外国の病院に、キョウちゃんの体を元通りにできるお医者さんが見つかったの』

ずっとこの体になければならないと思っていたぼくは、その話を聞き流さずにはいられなかった。いつもの黄色の表示がいつもより光っているように見えた。

『もちろん、お金はかかるけど、それはママが何とかするから大丈夫。それと長く時間がかかるけど、必ず治るらしいわ』

その医者は、ぼくの手足に変わる金属のそれらを、ぼくの体に装着する。そして、小さなカメラの着いた精巧な目を入れて、顔にぴったりと合う人口の鼻を、そして、口を元通りに開いて紅い唇をつける。ママの話はこんな内容だった。

それを聞くうちにぼくは新しい疑問が生まれ始めた。それに気づいてもらうまで、いつものように首を横に振り続けた。

『どうしたの？大丈夫よ。お金なら絶対に貯めてみせるから』

違うよ、そうじゃない。ぼくの体が、たとえ元の五体に戻ったとしても、もう何もかもが遅いんだ。全部元には戻らないよ。

だって……いや、いや。どうせ分かるはずがない。

『手術中はね、麻酔をかけるから全然怖くないから平気よ』

そんな事じゃない。体を弄られるのは、あのきちがいのおじさんでもう慣れちゃったから平気だよ。ホントにあつという間だったんだから。知らない間に手や足や口や目を盗まれたんだ。誰も助けに來ないまま、全部持って行かれちゃったんだから。

『時間だって、長くかかるって言ったけど一生かかるわけじゃないから。キヨウちゃんがまた学校で、お友達や美歩ちゃんとまた仲良くなれるから』

そうさ、元通りになったぼくを見て、あいつらは盛大に歓迎してくれるよね。以前、ぼくをバカにしたり、気味悪がったり、怖がって泣いりした事なんて綺麗さっぱり忘れてさ。

『どうして？キヨウちゃんは元に戻りたくないの？』

連中が忘れても、ぼくは忘れない。キモ虫。キモムシ、キモムシ。まるで毛虫みたいだね。そう言われた事を忘れて、ぼくに元に戻れと言つたの？その時の言葉と違って、文字で言われた記憶は怖いほど忘れにくい。いつまでも消えずに、形になって残るからだ。

『皆は願っているのよ。おばあちゃんやおじいちゃん、親戚の人だって、お金を出してくれているの。この間のテレビを見て、寄付を

してくれた人だつてたくさんいるのよ。なのに、キョウちゃんがそんな態度なんてダメよ』

何がダメなんだよ？段々痛くなるのを無理に我慢して、ぼくは首の振りを一層強くした。勝手にお金を出して、勝手に体を直させて、何をぼくの口から言わせたいのさ？皆ありがとうございました、このお礼は一生忘れません、か？

『ずっと死ぬまでこのままにはいられないの。このままでキョウちゃんが大になると、体に悪い影響も出るの。重い病気にかかりやすくなるって、病院の先生も言っていたの。体を元に戻すには今しかないの。ねえ、分かってちょうだい』

鬱陶しいくらい長すぎる文字が、闇の中に流れ出すのをぼくは無視しようとした。普通の体だったなら、口を締めて、耳を塞ぎたかったし、目を瞑りたかった。ママは何も分かっていない。体が元に戻ったとしても、時間や記憶は戻らないし消えたりはしない。知りたくもなかった事がチャラになるわけでもない。

『分かっているの、このままこの体のままでいれば、キョウちゃんは死んでしまうのよ。それでもいいの？』

別に、いいよ。首の横振りを一端止めて、見間違うはずがないように、はつきりと縦に思いつきり振って、肯定の合図をした。

ぼくはもう、死んでもいい。

『どうしてよ、皆が心配しているのに、ねえ、どうしてよ』

ぼくはそれを聞き流しながら、再び首を横に振り始めた。それからママは何かを言っているようだったけど無視していた。

もう、どうでもいいじゃない。ここはぼくにとつては蛹なんだ。一生外に出る事もないまま、中にいる虫は死んでいく。それがぼくなら、それでもいい。外に出ても、ぼくは笑い物か化け物のどちらかの扱いしか受けない。皆は普通のまままでいて、ぼくはロボットのようになる。そしてまた新しい言葉でバカにされ続けるんだ。

それなら、いっその事。

突然、何かの力で首を止められたぼくは、その間を置かずに頼っ

ぺたに痛みが走るのを感じた。ママがぼくをぶつたんだ。

また叩かれるじゃないかと、ぼくは体を曲げて硬くなっていただけ、結局何も起きなかった。床が速い間隔で揺れた。ママが部屋から出ていったのが分かった。ぼくはひとりぼっちになった。

真つ黒の世界は、相変わらず静かなままだった。

もう、いやだ。ぼくのように、全部、消えてしまえばいい。

8

翌日、ママがその言葉を打ち込んできた

『昨日はごめんなさい』

何も反応を返さなかった。何を言おうと同じだから。もうぼくの部屋には誰も来なくなった。その理由が今の自分にあるのは言うまでもない事実だ。この姿のせいでぼくだけでなく、この家をダメになってしまった。たった二人しかない小さな家、そしてその周りに広がる学校や友達という広い世界。

この体が蛹になった時から、そのすべてが崩れ始めた。一度壊れたものは、もう元には戻らないし、もう望みもしない。

『ごめんね』と文字が浮かんでは、しばらくして消える。

じつとしていると、部屋を出ていく揺れを感じた。

それを最後に長い時間が過ぎた。半日は過ぎただろう。いつもは数時間おきにママが部屋に着てトイレのタンクの入れ換えや、服を着せかえたりしてくれたのに。

それにお腹もすいた。もうすぐ昼ご飯の時間になるはずだ。首のチューブは自分では付けられない。それもいつもママがしてくれるはずだった。なのに、まだ帰ってこない。

一体どこへ行ったのだろうか。ぼくを見捨てて違う所へ引っ越したのか。ここに置き去りにされたままならば、いつかは死ぬ。結局あのおじさんにバラバラにされた時から、自分は死ぬ運命になっていたのかもしれない。

だったら、その方がずっといい。このまま生きていても、同じ辛い思いを繰り返すだけだ。皆が汚い言葉でぼくの頭の中に送って離れていくのは、まぎれもないこの姿のせいだ。

お腹が容赦なく鳴り続けるが、何もできない。自分で物を食べる事さえ出来ないなんて。ぼくはずっと暗い所にいる。最初の内はその中から怪物が出てくるような気がして怖かった。でも最近は何だか心地よく感じる。まるで元々いた場所にいるみたいだ。

ここにいれば、誰もいじめる奴もいない。誰も何も言ってくる事もない。でも、頭の中の宇宙空間を漂っているぼくに、もう誰も手を差し出す事もない。それに気づくことさえもないだろう。

もう、どれぐらいの時間が過ぎただろうか。夕方か、もしかすると、もう夜になっていているかもしれない。空腹も通り越して、何だか気分が悪くなってきた。吐き気がする。でも、口は閉じられてしまっているから、首のチューブを伝って、酸性の胃液が逆流する。使いたい物にならなくなった鼻の穴からも流れ出して、顔中が締め付けられるような痛みが襲う。

その時、バランスを崩してしまい、ぼくの体は支えになった椅子から転げ落ちてしまった。額が床に当たり、肩口がそれに次いでフロアディングに当たる。痛みの濁流が押し寄せ、僕がうめいたが声は首のチューブから無音になって消えていく。

その衝撃で、股間に入れていた力が緩み、ぼくは失禁した。漏れたそれらが床に広がり体を濡らすのを感じた。鼻がないおかげで臭いがしないのは、唯一の幸いだった。

うつ伏せになったぼくは起き上がろうとしたが、おなかや背中にもまったく力が入らない。それはまるで、麻酔をかけられたあの時と同じだった。頭が重く。前に持っていく事も出来ず、首を横に曲げたまま身動きが出来なくなった。

確か、ママは家を出る時、『ごめんね』と言った。

あれは、ぼくを叩いたり蹴ったりしたのを謝ったのではなく、ぼ

くを見捨てる事を謝ったのではないだろうか。もしそうなら、ママにまで見捨てられてしまったのだ。もう誰も助けてはくれないと思っただけだが、もうホントに涙も出てこない。ぼくはこのまま、小便に塗れたまま死ぬのだろうか。

もう誰も助けにこないのだから、きつと今度は間違いない。あのおじさんの部屋から、無事に逃げおおせたと思っていた。けれど、結局は追いつかれた。僕が死ぬのは決まっていた事だったんだ。

蛹にされるさらに以前の出来事を思い出そうとした。

手足があつて口も鼻も目があつた平凡な日々を、ぼくは当たり前のように生きていた。手足がなくなつたらと考えた事もなかった。

あれは確か一年の時、内緒で学校に初めてDSを持って行って、見つかるのが怖いから結局出さずに終わってしまった。

テストで準備も完璧だったのに、名前を書き忘れて、人生最初の0点を取ってしまったのは確か小学二年の時だった。あの時、ママはカンカンに怒って、お小遣いを減らされちゃったんだっけ。

そうだ、その年に美歩ちゃんとママと三人で、朝から遊園地に行ったのに、いきなりぼくだけが迷子になって、半日中迷子センターで泣いていた。夕方になって、係員のお兄さんの前で、ぼくは売り飛ばされちゃったんだって大声で喚いていたら、やっとママ達が来てくれた。ぼくは涙と鼻水を垂らしながらママに走っていった。でも、それを美歩ちゃんに見られたのがとても恥ずかしかった。ママに混じって、よしよしと赤ん坊のようにぼくの頭を撫でる美歩ちゃんを、怒ったぼくがその頭を叩き、彼女も大泣きして大騒ぎになった。それを必死になだめる係員さん。

あれ？それはいつの事だったか。幼稚園、一年。本当の闇がぼくの意識を覆う。普通の黒よりも、一層濃い闇は、端から徐々にぼくの景色を染めていく。

あれは死の闇だ。黒いマントを着た死神がぼくを迎えに来たんだ。大きな鎌を構えて、そいつはまだ生きていくように業を煮やしている。しぶといぼくを、向こうの世界に連れて行く気だ。

嫌だ。ぼくは闇の中で声を上げた。そして今まで信じていないはずだった神様に祈った。もう元の姿に戻りたいとは言わない。でも一人にはなりたくない。神様、どうかお願いします。ママがいつものように帰ってきてますように。

ぼくは強く、闇の中で願いを込めた。

お願いします、神様。僕はこのままでも構いません。だから家族に会わせて下さい。神様、どうか。

ぼくは蛹のまま、闇の中でその時が来てくれるのを待ち続けた。どれだけの時間祈りつづけただろう。

朦朧とする意識の中、突然体がふわりと浮かんだような気がした。誰かの手が床に転がっていたぼくを優しく抱きしめて、急ぐように椅子の上に座らした。

呼吸が楽になる。チューブが首の穴に挿入されたのだ。

そして常闇の中で、いきなり黄色い言葉が出現した。

『キョウちゃん、ごめんなさい、ごめんなさい』

同じ言葉がいくつも浮かんでは消える。でもそれがあまりにも早いせいなので、機械の方も追いつかず闇の中に黄色に光る『ごめんなさい』が点いては消えるハレーションで埋め尽くされ、前の言葉は消える事なく残って何重にも重なる。それらは、しまいに闇を覆い尽くして隠してしまう。そしてフリーズしてしまったように『ごめんなさい』の文字の群れは止まってしまったまま消える事はなかった。

それらは、まるで花火みたいで綺麗だった。

ぼくはずっと一人で闇の中を彷徨っているものだと思っていた。

その外にはい誰もいないと信じ込んでいた。でもそうではなかったんだ。

この真つ暗な世界の外の、また外の世界には大勢の人がいる。ぼくの今の姿を見て、たとえ以前と心が変わってしまう人がいても、反対に、ずっと変わらないままの人もいる。それに、もしかすると、

これから会う人の中にもそんな人が混ざっているかもしれない。いないかもしれないし、いるかもしれない。

その数はとても少ないだろう。けど、存在するかもしれないその人達は、この気持ち悪いはずの顔に優しく手を触れてくれる。喋る事ができない自分に、言葉を文字にして話しかけ、遊んでくれる。そして、細く小さな体を抱きしめてくれる。

そんな人達がいってくれるなら。それなら、ぼくは。

おかえり、ママ。音のない闇の片隅で、ぼくは言った。

すると『ごめんなさい』ばかりの黄色い壁を分け入るようにして、その新しい言葉がゆっくりと流れてきた。

『ただいま』

《了》

(後書き)

本作で二作目になります。もっと少年と他人との絡みを描いていきたくった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7220n/>

蛹

2010年11月14日00時10分発行